

第 591 回：論文やレポートの書き方について (5) (DM)

みなさまこんにちは。LA 毎週月曜 12:00~15:00 担当、博士課程 2 年の DM です。

今回は、これまでの内容を簡単におさらいしていききたいと思います。

私たちは論文やレポートの書き方について学んできました。論文やレポートとは、「問いに対して明確な答えを主張し、その主張を論証するための文章」(戸田山 2022:13) のことです。

論文とレポートの区別は人によって基準が異なる場合がございます。一般的には、レポート——「研究・調査にもとづいて書かれた報告一般」(澤田 1977:20) ——に自分の主張を加えたのが論文ですが、とりわけ人文系の場合は、レポートにも何らかの意見が求められることが多いので、この区別は絶対のものではありません。この連載では、「論文／レポート」の区別は、「(学術的な新しさ)ある／なし」で判断したいと思います。

大学生がレポート課題や卒業論文を書く意義は、「論理的に文章を書くスキル」(戸田山 2022:13) を得るという点にあります。大学生たるもの、教養ある社会人として、自分の意見に自分で説得力を与える技術を得ているのが望ましい、ということなのでございましょう。

論文(レポート)の書き方には基本となる手順があります。古典的な論文指南書でありますウンベルト・エーコの『論文作法』を参照しますと、だいたい、1) 問題設定をして、2) 資料を集めて、3) 計画を立てて作業を進め、4) その結果をまとめて原稿を作成する、という手順になるかと思われまます。

ただ、論文(レポート)というのは、手順を覚えるのはそう難しくはないにせよ、その手順を実践するのがとても大変です。手順の明快さと実践の複雑さを説明するためには、やはり、具体例を出す必要があります。そこで私は、この連載にて、自分で短いレポートを一本作成することにしました。

レポートの題材には、谷崎潤一郎の随筆『文章読本』を選びました。そして、前回(第 589 回)掲載分にて、この『文章読本』から、「含蓄」という言葉をキーワードに選んだのでした。

つまり、ここから問題設定を始めていくこととなります。ただ、この「問題設定」という言葉には、注意が必要です。

論文(レポート)は科学的な方法に基づいて書かれた文章ですから、第三者にも再現可能なことを書く必要があります。ですから、問題設定をする場合にも、「なぜこの問題設定が必要なのか」、その根拠を、第三者にも分かるように書かなければいけません。

論文(レポート)を作成するために先行研究が必要な理由のひとつがこの点にあります。「私の問題設定が必要であり重要なのは、背景にこのような文脈があるからです」ということを、信頼できる先行研究を参照して、証明できなくてははいけません。

これを「含蓄」の話に当てはめると、私は、問題設定をするために、「そもそも谷崎の「含蓄」が問題になり得る文脈があるのか」を調べなければいけないこととなります。これは、次回、実践していきたいと思えます。

というわけで、今回の LA 通信はここまでです。次回もどうぞよろしくお願ひいたしま

第 591 回：論文やレポートの書き方について（5）（DM）

す。

参考文献

エコ, ウンベルト (1991) 『論文作法』(谷口勇訳) 而立書房

木下, 是雄 (1994) 『論文の組み立て方』(ちくま学芸文庫) 筑摩書房

澤田, 昭夫 (1977) 『論文の書き方』(講談社学術文庫) 講談社

戸田山, 和久 (2022) 『論文の教室: レポートから卒論まで』(NHK ブックス; 1272) NHK 出版